

青い日々

uristory

[夏]花火が消える前に

河原では打ち上げ花火が次々と打たれている。
彩り鮮やかだけど、俺の心は一瞬にしてモノクロになった。

熱帯夜のもわっとした暑い空気が俺に纏わりつく。
それもお構いなしに走り続ける。
一つの思いがぐるぐると頭を駆け巡っていた。

何で。
何で俺は気づけなかったんだ。
ここ最近おかしい態度とっていたじゃんか。
どうでもいいことで怒るような奴じゃなかったし。
ちょっとした事で感動するような奴でもなかった。

...でもなんで一番近くにいる俺が知らなかったんだよ。
知らされたのは周りの奴ら。

「え、お前知らなかったの？」
「以外一！今日の夜、出発って言ってたよ」

だからか。
今日の花火大会に参加しなかったのは。
祭りごとが好きでアイツが、花火大会に参加しないのはどう考えてもおかしかった。

「風邪っぽいから」そんな理由、嘘だとなんで気づけなかったんだ。

流れる汗がボタボタと地面に落ちていく。
俺が走ってきた道に跡をつけるように。

ようやく着いたアイツの家。
息を整える...なんてそんなことしてらんなかった。
そんなことを思う前にもう、インターホンを押していた。

インターホンから聞こえたのは、優衣の声。

「はあ...はあ...お、おれ...」

「タク？」

ようやく俺はTシャツの袖で汗を拭った。

鍵が開いた音がして扉に目を向けると、扉の向こうから優衣の姿が見えた。

「優衣...」

「タク...」

「お前っ、なんで言わないんだよ!!」

“実はねあたし、今日の夜でこの街を出るんだ。”

“んじゃ、バイバイ!”

そうやって唐突に告白して明るく振舞ったって、俺には通用しない。
この孤独野郎が。

「他の奴がお前をいつか忘れるとしても...、俺は...俺は忘れない」

玄関の門まで出てきた優衣は眉間に皺を寄せて俺を見た。

「だから...俺にはちゃんと言って欲しかった」

寂しがりやで、そのくせいつも自分は孤独だって思いやがって。
面白くて脆くて、訳わかんない奴で。
だからなんだか傍にいてやりたいて思ってたのに。
いや、いたかったんだよ、俺が。

今は友達でもいつかは言おうと思っていたこと。

「だって俺は」

「待って、タク！」

優衣は門を開けて俺の目の前に立った。
遠くで花火の打ちあがる音が聞こえる。

「言わなくてごめん」

「...なんで言わなかったんだよ」

「タク、あたしのことよくわかってくれてて有難い。でも…。でも、それが怖い」

優衣の視線は、珍しく人の目をしっかり見て話している。
そしてその目には涙が溜まっていくのがわかった。

「離れて会えなくなるのが苦しいなら、あたしから捨てるしかないの!!」

零れた涙は地面に落ちた。
さっき俺が汗で地面を濡らしたように、丸く跡をつけた。
それを踏み潰して俺は優衣を抱きしめた。

「会えなくなってもどかしくなるのが嫌なのは一緒。それでも俺は優衣の中から捨てて欲しくない」

泣き声が俺の胸にぶつかって、ズキズキする。

「気持ちだけでも俺はお前の傍にいるから、お前も俺の傍にいてよ」
「…ぜっ、ぜったい？」
「絶対」

背中に回ってきた手。
大きくなる泣き声に思わず鼻で笑ってしまった。

「もおー!!大丈夫だから!泣くな、アホが」
「あほじゃ、ねーし…。感謝、してんだよっ、ばーか」

今まで鳴っていた花火の音はいつの間にか消えていた。
それに気づいたのは俺の体から離れた優衣だった。

「花火…終わった」
「…どこに引っ越すの？」
「北海道」
「…まあ遠いな」
「いや、完全に遠いでしょ」

未だ実感がないんだろう。
突然の知らせで毎日会っていた人と離れ離れになるなんて。
しかも大切な人が。

これからどんな日々になるんだろうって考えても、考え付かない。

一旦気持ちが落ち着いたのか、優衣は暗い空を見上げた。

「あたしにはタクがいるんだあ...」

突然発した言葉を理解するのに少し時間がかかった。

理解した瞬間に、恥ずかしさがこみ上げてきた。

「てか、もうすぐ出発だろ？てか何で夜？」

「ん？いや、出発は明日だよ」

.....

「え？」

「明日の朝。夜とかないでしょ。どこ情報よ」

一瞬にして優衣がこの街を離れると話していた奴の会話が蘇る。

そして一部、嘘が混じっていたことを解釈すると、怒りがこみ上げてきた。

「でもまだ準備終わってないから、そろそろ戻らないと...」

「あ。うん」

感情が次々と入れ替わる今日の俺。

とりあえず息を深くすって吐いて気持ちを落ち着かせた。

「じゃあ、帰るわ」

「...うん」

優衣の顔には寂しさが浮かんだ。

だからそのほっぺたをつねってやった。

「イテテテ！」

「また会える。電話するしメールもする。な」

胸がドキっとした。

今までに見たことのない、安心した優衣の笑顔がそこにあったから。

つねってたほっぺたから手を離した。

「ありがとう、タク」

「またな」

「また」

手を振ってその場から立ち去る。

...正直振り返ったら帰れなくなりそうだったから、

自分の為にも振り返らずに歩いた。

きっと明日からいつもと違う日々に不安を抱くんだろうけど、でも俺は信じる。

優衣が俺を信じ続けてくれることを。

[冬]ふたご座流星群

“ふたご座流星群、今日だって！”

大人たちは流星群とか興味あるのかな？

14歳の僕らにはそれはそれはお祭りの時のようにワクワクで。

しかもみんなであの丘に集まって見ようと計画立てた時は、

もうこれから冒険をするかのようなドキドキでワクワクな気持ちだった。

夜の10時に丘集合。

真冬の寒さに負けないように防寒対策。

ニット帽にネックウォーマーをして、いつものジャンパーを着て家を出た。

ポケットに入れたカイロはまだ熱くなっていなかった。

自転車に乗り込んで、丘に向かう。

ぶつかる空気がとても冷たかった。

だけどこれから始まるイベントのおかげで、寒がりの僕でも耐えることが出来た。

「広海！」

十字路を通り過ぎた時に聞こえた声。

慌ててブレーキを握ると、親友の小次郎が後ろから追いかけてきていた。

「小次郎」

「なあさっき一つだけ流れたんだよ！俺一番じゃね？」

小次郎の表情がとても嬉しそうで楽しそうで、僕もつられて楽しい気持ちになった。

「ピークの時に見れるかな？」

「ピークヤバイんじゃね？ビュンビュン流れたりして」

二人で並んで自転車を漕ぐと同時に始まるこれからの想像。

楽しくて楽しくて早くピークにならないかと待ち遠しい。

少しの坂をたち漕ぎで上る。

二人でくねくねしながら笑顔で上っていった。

そして平坦な道になると見えてくる丘の麓。
もう何台か自転車が止まっている。
僕たちも自転車を止めて、階段を駆け足で上った。

足はそろそろ疲れてきたけど、それと反比例してテンションは上がっていった。

頂上に着くと、見慣れた顔が振り返る。

「広海、小次郎！ねえすごいよ！じっと見てると、もう流れてる」

そんな興奮気味に言ったのはえっちゃん。
えっちゃんは真理と腕を組んではしゃいでいた。
...ニット帽をかぶってる真理が僕の目にはとても可愛く見えて、少し見惚れてしまった。

ボーッとしていると、知らないうちに小次郎が真理の隣に立っていた。

「てかさっきでっけーの見なかった？」
「見た見た！丁度、あたしたちがここに来たぐらいに流れたの！」

僕も慌てて輪に入る。小次郎の隣だけど。
でも、この輪に居られるだけで僕ななんだか十分だ。

そして流れた流れ星。

「あっ！」
「えっちゃん反応はえー」

小次郎のツッコミの早さにも僕は驚いた。
そんな二人を見て僕と真理は一緒に笑った。

「二人とも面白いんだけどっ」
「何!?何も面白いこと言ってないんだけど!!」
「絵知佳一、真理一！あ、小次郎くんと広海いー」

仲間が次々と集まってきた。
ざっと10人以上はいるみたいだ。
みんなで今まで流れた流れ星の話で持ちきりになる。

みんなが同じテンションでなんだかとても楽しい。

小次郎が女子たちとふざけ合いをし始め、僕たちの輪から外れた。

僕の隣は少しだけ空間があいた。

その向こうには真理の姿。

ふいにポケットに手を突っ込んだら、右ポケットに入ってたカイロが温かくなっていた。

それを出して両手でくしゃくしゃといじっていると、真理が「あっ！」と僕を見て言った。

「広海、カイロ貸してー」

「んー」

言われるがままに貸すと、僕と同じようにくしゃくしゃとカイロをもむ。

手に何もなくなると僕は無意識に手をポケットにしまった。

右ポケットがカイロのぬくもりで温かかった。

「あったかー」

「そりゃよかった」

みんなが見る先は空。

誰一人逸らさずに流れる星を待った。

だけど、さっきの流れ星から随分と時間が経っていた。

遊び始める人も出てきたし、少し退屈でベンチで座りながら眠りだす人もいた。

えっちゃんと真理が騒いで他のグループの所へ行ってしまった。

真理からカイロだけは返してもらったけど。

だから僕は近くのベンチに座って空を眺めた。

時刻は午後11時40分。

僕は見た。二連続で流れる星を。

「流れ星!!」

僕の声に反応したみんなは空を見始めた。

そしてまたすぐに星は流れた。

みんなのテンションが一気に上がる。

僕はじっと空を見つめた。

視界の端に真理が見えた。

そして真理は僕の隣に座って、空を見上げた。

「すごいね！ピーク来たのかな」

「来たね。あ、また流れた！」

次々に流れる星を見て、僕らは子供ながらの好奇心でワクワクした。

でも僕はドキドキもしていた。

多分、隣に真理がいるから。

「ま、り…」

「ん？」

「そのニット帽可愛いね」

空を見てる視界に真理のニット帽が見える。

違う。可愛いのはニット帽じゃないんだ。

「これ可愛いでしょ。お気に入り！」

「そっか。似合ってるもんね」

「ホントー？ありがと」

チラリと真理の顔を見ると、星のように輝いて見えた笑顔。

やられた…。と心の中で本当に思った。初めて思った。

なんか衝動が走って僕自身でそれを止めることができない。

まるで流れ星が僕の背中を押しているかのよう。

「あ！」と真理が突然叫んだ。

「どうしたの？」

「ねえ、お願い事した？」

…忘れてた。

流れ星にお願い事か。

星が流れてる間にお願い事を三回唱えると、その願いが叶う。

「まだだ」

「じゃあ次、流れたら二人でお願い事しようよ！」

「うん」

そう言って僕らは黙って空を見上げた。
そして流れた一つの星に願いを唱えた。

「星、早い！」

「言葉一回しか唱えられなかった、僕」

「あたしもー」

真理、どんなお願い事したんだろう。
視界の端で空を見上げる真理の横顔が見える。

「ねえ広海。何願った？」

「真理は？」

僕はするい。
僕の願いは両想いになれますように。

「広海と両想いになれますように」

また一つ星が流れた。
ざわざわしていた周りや僕の何かが一瞬にして消え去った。
真理を見ると、星のように輝いた笑顔がそこにあった。

「...僕もだよ」

思わず出た言葉に、真理は驚いた顔をした。
そしてだんだんと笑顔になって僕らは笑いあった。

「じゃあ...。あたしと付き合ってくださいか？」

真理の目を見つめて頷いた。
また二人で恥ずかしくて笑いあう。

楽しくて嬉しくて最高だ。
ふたご座流星群の日は、僕らの記念日に塗り替えた。

僕と真理の心の中で。